

「戦後」とは

写真は『毎日ムック 戦後 50 年』から。「玉音放送を聞く人々--大阪 8/15」と記されている。全国各地で、多くの人たちが聞こえにくい玉音放送に耳をすましたことだろう。たぶん、母も岐阜の疎開先で。この 1945 年 8 月 15 日が 15 年に及ぶ侵略戦争が終結した日、「終戦」「敗戦」の日だと考えてきた。この日から「戦後」が始まると。



佐藤卓己・京都大教授は『岩波講座 現代』第 5 巻総説『「戦後 70 年」歴史の再編を見すえつつ』で、そんな「戦後」に問題を投げかける。「8・15」「戦後」について考えさせられる論考なので、一部だけでも紹介しておきたい。

1945 年からの「戦後」という歴史認識が半世紀以上も続いた国はほとんど日本だけと言えよう。実際、世界中の国々の歴史教科書において「戦後」postwar は 1950 年代で終わり、それ以後は「現代」contemporary となっている。日本だけが長い「戦後」という特異な時間枠をいまも採用しており、それは「悪しき戦前」と「良き戦後」を分断する「8・15」断絶史観に支えられてきた。

今日に至るまで終戦記念日のグローバル・スタンダードは、降伏文書調印式が行われた 9 月 2 日である。地理的に言えば、「8・15 終戦記念日」という枠組は沖縄や北海道の記憶を周辺化させることで成立してきたわけである。結局、8 月 15 日に終わった戦争は世界史では存在しない。それにもかかわらず、私たちは 8 月 15 日を「終戦記念日」として記憶している。そうした集合的記憶がメディアで創出された---。重要なことは、「8・15 終戦記念日」の記憶とは終戦 10 周年の 1955 年から始まった「8 月ジャーナリズム」の産物だということである。

8 月 15 日を境に戦前と戦後を明暗で塗り分ける「8 月ジャーナリズム」には、戦前と戦後の連続性を見えなくする効果もあった。そのことが戦時下から占領期を経て今日に至るメディア統制の連続性を隠蔽してきた。1945 年 8 月 15 日を境に本質的に変化したメディアは、新聞、放送、出版などどの分野にも存在しない。敗戦によって破綻したメディア企業はほとんどないのである。こうした意味で、「8 月ジャーナリズム」は戦争の記憶にではなく、戦後の忘却の上に成立している。

いま必要なのは、グローバルな視野で世界全体を展望する視座、そして柔軟な歴史的思考力というべきだろう。たとえば「8 月ジャーナリズム」の「9 月ジャーナリズム」への転換である。

(2016 年 8 月 15 日)